

若い人たちに語り継ぎたい、
次の世代に残しておきたい。
貴重な話をお届けしますー。

あすへひとこと

いつの時代までも残したい

邑楽町の昔ばなし



赤堀長良神社脇の小道。昔は大蛇川という大きな川でした。南へ下ったところにお伊勢様があったそうですが、土地改良で壊されてしまったそうです

お伊勢様の大蛇

赤堀に享祿2年（1529）青柳城主赤井照光が出張りを設け、橋本新蔵に守らせたという、橋本館跡がありました。昔、そこには大きな外堀がありました。

外堀は幅が広い所では5間半（約10m）以上もあり、木立に覆われ、所々陽が差しますが、幅はだんだん狭くなり、やがてカヤやカツモが生い茂った中を、幅1間（約1・82m）ぐらいで流れ、まもなく赤岩から赤堀への橋の下を通り、橋場川へと流れました。

その堀のカヤやカツモが茂り、右手に明王院が見える所にはお伊勢様が祭られていました。お伊勢様はそばまで行かなければ分らないような小さいほこらでした。その辺は、川幅も少し広くなり、よくフナやザッコが釣れました。

しかしそこには大蛇がいるというので、魚釣りに近寄る人は少なかったのです。あるとき一人の釣り人が、「大蛇なんて、いるはずがない。そんなことは嘘だ」と言っておぼの茂ったカヤの生えている中に入ってしまった。

ところが、間もなく真っ青な顔をして、ものも言わずに帰って来て、そのまま三日寝込んでしまいました。あとで聞いた話では、その人は大蛇を

見たのだそうです。とぐろを巻いていたので長さは分からないが、太さは一升瓶（1.8ℓ）ぐらいはあったそうです。その大蛇が鎌首を持ち上げて、釣り人をぐつとにらんだその目の光に思わず腰が抜け、口も聞けなくなったそうです。

江戸山の由来

篠塚坪谷の工業団地造成でできた会社の敷地に、昔、江戸山といわれた山林がありました。山林は赤松が繁茂し、東に延びる丘陵は鞍掛山脈と呼びました。春には、山つじが咲き、松の緑とあわせ、見るからに美しい憩いの場所でした。

しかし、ここには気の毒な話があります。山林にはどこからともなく来た人が住み着き、戸数も増え、20軒ほどになりました。なんでも、その人たちは遠くから、訳あって来た者たちで山林を開墾して農業を営み暮らすつもりだったようです。

しかし、運悪く伝染病が発生してしまい、疫病は次々に広まり、全部の人たちが病死してしまいました。里の人たちは、あの人たちは江戸山から来たのではないかと噂し、家を建てたところを江戸山と呼ぶようになったのではないかとされています。後に、江戸山からは食器類が発掘されたといわれています。

【発行】邑楽町老人クラブ連合会 【編集】あすへひとこと編集委員会
平成10年12月31日発行「高齢者の語り(第六集)あすへひとこと」より

ひとりごと From editors

▶中央公民館の現場ワークショップ。これを機に建設現場をしばらく見学。重い物でも軽々と持ち上げたり、高い場所でも余裕で作業したりする姿、重機を思いのままに動かすテクニック…。うーん、作業員さんたちとてもカッコイイ！▶ある作業員さんは「仕事のやりがいは何と言っても、頑張った成果が『カタチ』に残ることだよ」と。…うーん、言うことまでカッコイイ！▶中央公民館は、作業員さんはもちろん、たくさんの方の技術や知識、理解や協力が結集して出来上がっていくんですね。…うーん、何だか広報紙も同じだなんて。▶今夏も暑くなりそう。日陰のない建設現場は気温以上の暑さに見舞われること必至。作業員の皆さんは、どうか体調に留意され、ものづくり頑張ってください！…はい、私も。(深澤)



新緑
(緑化センター)



Photo 高根澤高明(記録ボランティア)

